

特別支援学校の児童同士が対話し深い学びを得る授業の検討

青木 爽*・樋口 和彦**

Sayaka AOKI Kazuhiko HIGUCHI

Considerations in Teaching Method to Get Deep Learning by Dialogue between Children in Special Needs Education

ABSTRACT

特別支援学校小学部の、ASDとダウン症の児童が在籍するクラスでの対話的な学びを実現させるための授業内容を検討した。子ども同士が対話を行う朝の会の「歌決め」の活動の改善の視点を、学級の教師と話し合い検討した。その結果、児童同士が対話し、深い学びを得るために、次の状況で授業の中で活動できることが必要であると考えた。すなわち、①自分の気持ちに気づく、②自分の気持ちを表出する、③他者の気持ちを意識する、④目的をもって参加する、⑤興味の幅を広げるという5つの条件である。5つの条件を満たすために、宣伝活動を組み込んだ新たな「歌決め」の授業計画を立案し実践した。その結果、児童が、他児童に意識を向ける様になり、対話が生まれ、児童同士の新たなコミュニケーションが見られた。

【キーワード：対話、深い学び、授業、ASD、ダウン症】

I 問題と目的

小学校学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、質の高い学びを実現し、児童が学習内容を深く理解するようになり、資質・能力が身に付き、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることをめざすとしている（文部科学省, 2017）。そして、中央教育審議会（2016）によると、「主体的・対話的で深い学び」とは、①学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか、②子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか、③習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという3つの視点を持つものである。

また、特別支援教育においても、「主体的・対話的で深い学び」のための授業改善の重要性を次のように述べている。

『指導方法の質的改善の方向性は、特別支援学校にお

いても同様』である。そして、障害のために思考し、判断し、表現することへの困難さのある子どもたちについても、障害の状態等に留意して、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、困難さに対応しながら、学びの過程の質的改善を行うことが求められる。

このように、「主体的・対話的で深い学び」は、教育の方向性は示されているが、具体的な方法は示されておらず、その実現に対する具体的な方法の研究は十分になされていない。

特別支援教育では、児童の障害による困難さに応じた授業改善が必要であると考えられるが、本研究では、コミュニケーションの問題を有し対話的な学びが困難であるといわれている自閉症スペクトラム障害（以後ASDとする）児を含めた特別支援学校小学部での授業の在り方を検討する。

II 手続き

1. 対象児

B市内のA特別支援学校の小学部第6学年Cクラスに在籍する9名（男児7名・女児2名）である。9名の障害種は、ASD6名、ダウン症3名である。

2. 期間

20XX年9月～11月。

研究のスケジュールをTable 1に示す。

Table 1 研究スケジュール

手続き	事前評価（従来の授業）：研究Ⅰ			授業実施計画（新たな授業）：研究Ⅱ					
	9月	10月		11月					
内容	授業観察①	授業観察②	情報共有(1)	授業①	情報共有(2)	授業②	情報共有(3)	授業③	情報共有(4)

* 島根大学教育学研究科臨床心理専攻

** 島根大学学術研究院教育学系

まず、Cクラスの担任4名と筆者で、事前評価を行い、これまで学級で行われてきた、朝の会の「歌決め」活動の内容を検討し、子ども同士の対話の頻度と質が高まる授業の計画を立てる。

その後、計画に基づいて授業を行い、コミュニケーションの問題を有し対話的な学びが困難であるといわれているASD児を含めた特別支援学校小学部での授業の在り方を検討する。

なお、Table 1に挙げた授業は、全て朝の会の時間に行う。

Ⅲ 研究Ⅰ：事前評価（従来の授業）

1. 結果

(1) 児童の様子

授業観察①②と担任教師への聞き取りにより得られた各児童の状態をTable 2に示す。

Table 2 学級児童の実態

児童（障害名）	授業観察より	教師の聞き取りより
A (ASD)	<ul style="list-style-type: none"> 自発的な発言はあまりないが、教師の質問に対して単語で答える エコリアを用いて自分の気持ちを表現する 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の気持ちを表出することがあまりない ※自分の気持ちを言えるようになる
B (ASD)	<ul style="list-style-type: none"> 自分の気持ちを言葉や行動で示すことができる 癲癇を起こすことで気持ちを示すことがある 	<ul style="list-style-type: none"> 歌を好む 廊下などの教室内の声が届く場所での参加も認める。 ※気持ちを表出する
C (ASD)	<ul style="list-style-type: none"> 単語で自分の気持ちを表出する 教師と相談しながら授業に参加する 	<ul style="list-style-type: none"> ※自分の想いが伝わらないことも受け入れられるようになる ※気持ちをわかりやすく伝える 教師と「次いつその願いが叶うのか」を確認
D (ASD)	<ul style="list-style-type: none"> 同じ質問を繰り返す 口調が定型文的 自分のしたいことが分かり、言葉で表現する 	<ul style="list-style-type: none"> 気持ちを表出するが、一方的なことが多い ※相手の気持ちを聞いて受け入れる ※自分の選択の理由が言える
E(ダウン症)	<ul style="list-style-type: none"> したいことを発表するのが難しい 他者の提案を受け入れるのが難しいことがある 	<ul style="list-style-type: none"> 少人数であれば自分の意見を言う ※気持ちを自分の言葉で伝える
F (ASD)	<ul style="list-style-type: none"> 自分で、「こうしたらよいのではないか」とアイデアを出す 自分の気持ちをはっきりと伝える 	<ul style="list-style-type: none"> 気持ちに気づいているが、表出するのは難しい ※自分の気持ちを伝える ※自分の選択の理由が言える
G(ダウン症)	<ul style="list-style-type: none"> 自分の気持ちを表出する 自ら様々な大人に話しかける 友だちを労わる 自分の想いを譲れないことがある 	<ul style="list-style-type: none"> 大人と話すことで気持ちの切り替えを行う ※ひとりで気持ちを切り替える
H (ASD)	<ul style="list-style-type: none"> 発言があまりない 自分の気持ちを表出することが少ない 	<ul style="list-style-type: none"> 二つの選択肢から選んで気持ちを表出する 周囲が表情から気持ちを読み取る ※自分で気持ちを表出する
I (ダウン症)	<ul style="list-style-type: none"> 言葉や態度、行動で自分の気持ちを示す 教師に意見を求められると答える 	<ul style="list-style-type: none"> 大人を介して気持ちを伝え合う経験を積んでいる ※自他の気持ちに折り合いをつける

※下線は教師のねがいを示す。

(2) 授業の様子

担任教師は、友だちの気持ちを想像することを学級児童の「深い学び」であると想定し、児童の対話を重視した活動を行っていた。そのうちの一つの活動が、朝の会の「歌決め」の活動である。授業観察②では、「歌決め」の授業を観察した。授業の内容をTable 3に示す。

Table 3 授業の内容

①歌いたい曲を考える	今月の朝の会で歌いたい曲をひとつ考える。
②発表する	考えた曲を一人ずつ発表する。
③その場にいない児童の歌いたい曲を想像する	教室外で参加している児童の歌いたい曲は何か想像する。
④歌いたい曲に投票する	自分の意見や友だちの意見を踏まえて、自分の歌いたい曲に投票する。
⑤多数決で曲を決定する	投票の結果、最も多く投票された曲に決定する。選ばれなかった児童を全員で励ます。

授業の中の各活動場面での児童の様子をTable 4に示す。

教師は、児童同士の対話を促したいと考えて対応していた。しかし、実際には教師と児童間の対話が多かった。児童の発言は教師に向けられたものが多く、教師を介して児童間の対話が行われていた。教師と対話をしていない児童は、他児童と教師の間の対話には関心がない様子であった。

Table 4から対話的な学びを困難にする要因を含む児童の行動を挙げると、①自分の好きな歌がわからない(⑦・⑳)、②他者の気持ちを受け入れることが難しい(⑧・㉑)、③他児童が挙げた曲を聴いても検討せず、自分の挙げた曲にこだわる(㉒・㉓・㉔)、④特定の児童が挙げた曲に投票する(㉕・㉖・㉗)などがあった。

また、活動場面5(多数決で曲を決定する)では、投票に関して対話している際、参加していたのはDとGで、その他の児童は、机に突っ伏したり(㉘)、ほかの物で遊んだり(㉙)していた。これに対し、教師は、不参加の児童に歌を決定する方法を尋ねるなどの工夫をしていた(㉚)。

2. 考察

事前評価(従来の授業)から、①自分の曲以外に興味を示さない、②他者の気持ちを想像したり、受け入れたりできない、③父親の好きな曲を挙げる、④特定の子どもの提案に同調するなど、対話的な学びを期待するには難しい状況であった。

これら4つからは、①自分の気持ちに気づいていない、②気持ちを表出できない、③他者の気持ちを意識できない、④話し合いに目的を持って参加していない、⑤興味

Table 4 各活動場面での児童の様子

活動場面	児童の様子								
	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1. 歌いたい曲を考える	①手や机をたたく ②体を前後に揺らす	③廊下で過ごす ↓	④教師と話す	⑤友だちに「もうちょっと考えたほうがいいよ」	⑥周りを見渡す	⑦「何がいいかな」と教師に聞く	⑧すぐに決め、まだ考えている友達を待たず、「えー」	⑨座って前を見る	⑩話している人を見る
2. 発表する	⑪「ポケモンゲットだぜ」単語で意思表示	↓	⑫紙に絵を描く	⑬友だちの曲に「別の時に歌いたい」	⑭歌いたい曲を伝える	⑮すぐに手を挙げ発表する	⑯気に入ると「いいね」気に入らない時は「やだ」	⑰表情を変える	⑱歌いたい曲を伝える
3. その場にはいないBの歌いたい曲を想像する	⑲「もうおわり？」と次の時間を気にし始める	⑳廊下で聞こえてきた教師に歌いたい曲を伝える	㉑教室の後ろで過ごす ↓	㉒体を前後に揺らす	㉓Bがよく聞く曲を挙げる	㉔曲が流れると手拍子を打つ	㉕Bがよく聞く曲を挙げる	㉖座って前を見る	㉗Bがよく聞く曲を挙げる
4. 歌いたい曲に投票する	㉘自分の挙げた曲を選ぶ	㉙悩んだのち自分の挙げた曲を選ぶ	↓	㉚迷わず自分の挙げた曲を選ぶ	㉛3で挙げた曲を選ぶ。	㉜好きな理由を聞かれ「お父さんが聴いているから」	㉝自分の挙げた曲を選ぶ。 ㉞Iに「1つだけだよ」	㉟あまり選択肢を見ず、普段聞いていない曲を選ぶ	㊱2つの曲を選ぶ
5. 多数決で曲を決定する	㊲どうやって決めたいと聞かれ「ポケモンゲットだぜ」	㊳廊下で過ごす	↓	㊴拗ねたGに「どうやって決めたい」「〇(自分の選んだ曲)は好き？」	㊵座って前を見る	㊶机に突っ伏す ㊷Dに「Gさん考えているからそっとしておいて」	㊸拗ねるが、「仕方ない」と他の曲を選ぶ	㊹座って前を見る	㊺話している人を見る ㊻スピーカーやテープの芯で遊ぶ

※矢印 (↓) は行動が継続していることを示す

の幅が狭いという5つの大きな課題が挙げられるだろう。

また、教師は、仲介することで児童同士の対話を促そうと努力していたが、教師と児童の対話が多く、児童同士の対話は教師を介したものであった。また、教師とやりとりしている以外の児童は、話し合いに参加している意識がないような状況であった。また、興味も幅が狭く、他の児童が聞いている曲へ関心が向いていなかった。これらのやりとりへの参加状況から、①話し合いに目的を持って参加していない、②興味の幅が狭いという2つの課題が挙げられるだろう。

また、児童の特性という視点から3つの分類ができた。

Table 2 から児童を挙げると ①自分の気持ちを強く表出する児童 (B) (G) (I)、②他児童の述べた内容に音声言語で応答している児童 (D) (E) (F)、③コミュニケーションや言語発達の遅れなどの障害の特性によりやりとりが難しい児童 (A) (C) (H) である。

③の児童は、自分の気持ちを表出できないだけでなく、他児童から、話し合いに入ることを期待されていないようであった。「対話的な学び」を実現するには、表出が難しい児童が気持ちを表出し、他児童から表出を期待される状況にする必要がある。

そのため、児童同士の対話を成立させることが第1の課題であると考えられた。

IV 研究Ⅱ：事前評価に基づく主体的で対話的な授業の構築

児童同士の対話を成立させるために、新たな授業の内容を検討した。

1. 「歌決め」授業の再検討 (担任教師との情報共有)

事前評価 (従来の授業) より、対話的な授業を構築する際の問題として、①自分の気持ちに気づいていない、②気持ちを表出できない、③他者の気持ちを意識できない、④話し合いに目的を持って参加していない、⑤興味の幅が狭いという5つの課題が挙げられた。

また、児童は、①自分の気持ちを強く表出する児童、②他児童の述べた内容に音声言語で応答している児童、③コミュニケーションや言語発達の遅れなどの障害の特性によりやりとりが難しい児童などさまざまな特性を有していた。

これらの課題に対応し、児童同士の対話が期待できる「歌決め」の活動を検討する必要がある。そこで、担任教師と筆者で、情報共有の時間を設け、授業の改善に取り組んだ (Table 1)。

2. 結果

(1) 新たな授業計画の改善の視点

まず、情報共有(1)では、従来の授業の改善すべき点を検討し、新たな授業計画を検討した (Table 1)。

新たな「歌決め」の活動は、児童同士の対話を促すため、①自分の気持ちに気づく、②自分の気持ちを表出する、③他者の気持ちを意識する、④目的をもって参加する、⑤興味の幅を広げるというという視点から検討することになった。次に、情報共有(1)で確認した各項目で重視する内容を示す (Table 5)。

以上の5つの観点をもとに作成した「歌決め」の新たな授業計画を担任教師に示し (Table 6)、新たに実施する授業の内容を検討した。

Table 5 新たな授業の改善の観点と内容

観点	改善の観点と内容
(1)自分の気持ちに気づく	自分の気持ちに気づくことが難しい児童が、自分が何を考えているのか確認できるようにする。そのため、じっくり考えたり教師と話し合ったりする時間を設ける。
(2)自分の気持ちを表出する	自分の気持ちに気づいていた児童が、他者に伝えるために表出することができるようにする。教師が、児童の代わりに画用紙等に表記したり、気持ちを確認しながら代わりに伝えたりする。また、すべての児童に時間を保証し、自分のペースで伝達できるようにする。
(3)他者の気持ちを意識する	従来の授業では、他児童の好きな歌を聴き、気持ちを想像する時間が設けられてきた。その結果、友だちは提示した曲をよく聴き、「なぜこの曲が好きか」考えていた児童も存在した。 新たな授業では、さらに宣伝活動を行い、他児童が「曲が好きな理由」に意識を向けるようにする。 また、発表児童は、発表を聞いた他児童の反応に意識を向け、効果的な宣伝の仕方を工夫する。
(4)目的をもって参加する	「歌決め」の活動の、「歌う歌を一つ決める」という目的は共有しやすいと考えられる。しかし、投票時に自分に関係ないと捉えて、参加の目的をもっていなかったと推測される児童が存在した。 事前観察より、学級の児童は、朝の会で自分の好きな歌をみんなで歌いたいという思いを持っていることが分かった。 従来の授業では自分の行動が結果に影響を及ぼさなかった。そこで、新たな授業では、宣伝という活動を行うことで、自分の伝え方で相手に自分の好きな歌の良さを知ってもらえるようにした。 自分の宣伝を工夫することで、自分の想いが他児に伝わり、投票してもらえるという目的を持てるようにした。
(5)興味の幅を広げる	従来の授業でも、他児童の気持ちを想像できるように工夫した活動が行われてきた。しかし、他児童の意見を聞いて自己の考えを広げ深めることはできなかった。 新たな授業では、友だちの好きな歌に意識を向け、これまで聴かなかった歌も主体的に聴けるようにしたい。宣伝を通して新たな歌に興味を持ち、興味の幅を広げることを目指したい。

Table 6 新たな「歌決め」の授業計画

	授業①	授業②	授業③	
授業内容	自分の好きな歌を発表	※宣伝のための話し合い活動	※宣伝	曲決定のための話し合い活動
授業形態	一斉指導	少人数グループまたは個別	一斉指導	
目標	◎自分の意思を持つことができる ○自分の意思を表出することができる	◎自分が好きな理由を知ることができる ○自分の意見を相手に受け入れてもらうためにはどうすればよいか考えることができる ○友達の良い気持ちを想像しながら考えることができる	◎ほかの人の発表を聞くことで、今まで関心なかったものに関心を持つことができる ○ほかの人の発表を聞くことで、自他の意思に折り合いをつけることができる	◎友達の良い意見を認めることができる ○自分の選んだ曲にならなくても受け入れることができる。
学習活動	①自分の歌いたい曲を考える ②歌いたい曲を発表する ③その場にいない児童の歌いたい曲を想像する ④出た意見の中から歌いたいものを選ぶ ⑤歌いたい曲に写真カードを貼る	⑧曲を宣伝するための準備をする ⑨友だちや教師と話し合う ⑩宣伝の材料をつくる	⑭自分の歌いたい曲を宣伝する ⑮友だちの宣伝を聞く ⑯再度友達の歌いたい曲を聴く	⑰歌いたい曲を再度選ぶ ⑱歌いたい曲に写真カードを貼る ⑲どの曲にするか話し合う ⑳最終的に選んだ理由を発表する
個別の活動例	⑥提示された選択肢から歌いたいものを選ぶ ⑦歌いたい理由を伝える	⑪自分の好きな曲を聴きこむ ⑫歌詞の中から自分の好きなところを見つける ⑬友だちや教師と話し合う	⑰教師と発表する ⑱歌って宣伝する	

※下線は、担任教師に改善案として提案し、新たに取り入れた内容

新たな授業は、3時間の計画とし、宣伝活動を設定し、宣伝の効果を考えて準備を行う時間を設けた。また、他児童の宣伝を聞いた上で、曲を聴いて他児童の推す曲の良さを感じられるようにした。

また、児童の特性①自分の気持ちを強く表出する児童、児童の特性②他児童の述べた内容に音声言語で応答している児童、児童の特性③コミュニケーションや言語発達の遅れなどの障害の特性によりやりとりが難しい児童、などの特性に応じた配慮を行った。

児童の特性①のためには、Table 6の(③)(⑮)(⑯)(⑳)を、特性②のためには、Table 6の(④)(⑨)(⑬)(⑮)(⑯)(⑳)を、特性③のためにはTable 6の(⑧)(⑨)(⑩)(⑭)(⑰)の活動を設定した。

(2) 授業の実施

授業は3回に分けて行われた。各児童の様子などをともに、授業ごとに結果を記述する。

1) 授業①

授業①の児童の様子 (Table 7) を示す。

授業①では、自分の好きな歌の理由を聞かれ戸惑ったり(⑳)、自分から気持ちを表出できず、他者に提案してもらったりする(⑲)など、自分の気持ちに気づいたり表出したりすることに難しさのある児童の姿があった。また、(⑯)のように、他者の意見を受け入れることが難しい児童もいた。

授業①は、従来の授業と同様の内容であるため、各児童は、研究Ⅰの結果と同様の行動をみせた。授業②からが、本研究で新たに組み入れた内容に入る。

Table 7 授業①行動観察記録

活動場面	児童の様子								
	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1. 歌いたい歌を考える	①教室の様々なところに視線を向ける ②絵本を机に出す	③事前に歌いたい歌を考え てくる ④自ら教師に伝えに行く	⑤教師と話す	⑥事前に歌いたい歌を考えてくる	⑦周りを見渡す	⑧事前に歌いたい歌を考えてくる	⑨事前に歌いたい歌を考えてくる	⑩座って前を見る	⑪事前に歌いたい歌を考えてくる
2. 発表する	⑫「ポケモンゲットだけ」と答える	⑬歌いたい歌を伝える ⑭好きな歌を聴く	⑮紙に絵を描く	⑯T1の歌に「それは3月とかに歌えばいい」 ⑰なぜその歌がいいのかを聞かれ「Cさんたちが喜ぶ」	⑱心ずかしくてなかなか言えない ⑲G・Dに提案された歌にうなずく	⑳友だちに「朝から聞いたら元気になっちゃう」 ㉑なぜその歌がいいのかを聞かれ「思いついたから」	㉒なぜその歌がいいのかを聞かれ「お姉ちゃんが好きだから」	㉓表情を変える	㉔歌いたい歌を伝える ⑵ホワイトボードに好きなアイドルの名前を書く
3. その場がないCの歌いたい歌を想像する	㉕指をいじるなど落ち着かない様子	㉖廊下と教室を行き来する	㉗教室の後ろで過ごす ㉘「〇〇好き」と聞かれうなずく	㉙Cがよく聞く歌をいくつか挙げる	㉚周りを見渡す	㉛やりとりしている人のほうを見る	㉜Dが挙げた歌に賛同	㉝Cの歌が流れるとリズムに乗って体を動かす	㉞話している人を見る
4. 歌いたい歌に投票する	㉟迷わずDの挙げた歌を選ぶ	㊱迷わず自分の挙げた歌を選ぶ	㊲みんなが想像した歌を選ぶ	㊳迷わず自分の挙げた歌を選ぶ	㊴2で提案された歌を選ぶ	㊵悩んだのち3の歌を選ぶ	㊶迷わず自分の挙げた歌を選ぶ。	㊷迷わず3の歌を選ぶ	㊸迷わず自分が挙げた歌を選ぶ

Table 8 授業②行動観察記録

活動場面	児童の様子								
	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1. 歌を宣伝するための準備をする	①音楽を聴きながら宣伝したい歌を考え直していた ②T2のお手本を見ながら画用紙に文字を書いていた	③画用紙に絵を描いた ④キャラクターの写真を貼った	⑤T1と相談しながら伝えることを決めていた ⑥画用紙に絵を描いた ⑦「マーカー」とペンを要求した	⑧歌詞を見ながら、自分の好きなところを探した ⑨理由を聞かれ「Cさんたちが喜ぶ」 ⑩T4と確認しながら書いていた	⑪T3と話し合いながら伝えることを考えていた	⑫T5と相談しながら伝えることを考えた ⑬T5に「気持ち何ですか(何を書けばいい)」と聞いた	⑭自分で文章を考えて書き始めた ⑮T2に話しかけていた ⑯書きたいことをホワイトボードにメモしていた	⑰T3が示す選択肢から選んで伝えることを決めた	⑱T5の質問に答えながら伝えることを考えた ⑲音楽を流すように求め、前回と違う歌を宣伝することに決めた

2) 授業②

授業②では、宣伝のための準備を行った。自分の気持ちに気づくことが難しい児童に対して、教師と話し合いながら、気持ちを確認する支援を行った。

授業②の様子をTable 8に示す。

準備の活動の中で、①自分の気持ちを強く表出する児童、②質は様々であるが、他児童の述べた内容に応答している児童、③コミュニケーションや言語発達の遅れな

どの障害の特性によりやりとりが難しい児童それぞれの特性に応じた配慮を行ったため、(①)(⑤)(⑦)(⑨)(⑩)(⑪)(⑫)(⑬)(⑮)(⑰)(⑱)のように、教師と共同し、自分に合った支援を受けて活動していた。

学級の9名の児童の中から、①言葉によって自分の気持ちを表出するD、②言葉による表出が難しいB、③教師と気持ちを確認したCの3名の発表資料をFig. 1に示す。



Fig. 1 発表資料

Table 9 授業③行動観察記録

活動場面	児童の様子								
	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1. 歌いたい歌を宣伝する	①「ポケモンゲットだぜ。」と叫ぶ ②音楽が流れると飛び跳ねる	③画用紙をもって前に出ていく	④T1とやりとりしながら発表する	⑤「友だち(A・C・Eなど)が喜びそうだから」 ⑥いろいろな友達に質問する	⑦恥ずかしくてなかなか前に出られず、T3と一緒に出る	⑧発表の最後に「お願いします」	⑨「恥ずかしいから一緒に行き」とT1を誘って一緒に発表する	⑩自分の番になると立ち上がって前に出る ⑪画用紙の字を読む	⑫周囲の反応を受け、嬉しそうな表情をする
2. 友だちの宣伝を聞く	⑬絵本を取り出してHに見せる ⑭Dの肩を抱く	⑮空いた席の上でポーズを決める ⑯Eの歌を歌う	⑰教師と話しながら参加する	⑱音楽に乗って体を揺らす	⑲発表している人をよく見る ⑳歌が流れると体を揺らす	㉑拍手する ㉒友だちの歌を聴いて、「ちょっとだけ元気になるよ」	㉓「歌います」というAに向かって「マイク」とペンを向ける	㉔発表する人の方を見る ㉕ときおり楽しそうな表情を見せる	㉖発表する人をしっかり見ている
3. 歌いたい歌に投票する	㉗迷わず宣伝した歌に投票する	㉘迷わず宣伝した歌に投票する	㉙少し悩んだのち、宣伝した歌に投票する	㉚宣伝した歌に投票する	㉛迷わず宣伝した歌に投票する	㉜宣伝した歌と他の友達が宣伝した歌とで悩んだ結果、Aの歌を選ぶ	㉝宣伝した歌に投票する ㉞友だちの投票するものを想像する	㉟迷わず宣伝した歌に投票する	㊱迷わず宣伝した歌に投票する
○その他 ㊲T1「今のところ一番多いのはハビネスだね」 →F「まだわからないよ、人が増えるかもしれないよ」 ㊳順番を決める場面、Gが「T1から順番にすればいいんじゃない」と提案する ㊴それに対し、D「それがいいな」 ㊵T1：Hがジャニーズの歌を宣伝する際に、別のジャニーズグループの歌を宣伝するIに対して「Hさんのもかっこいいんだね」 ㊶「A・C・Eが喜びそうだから」というDの言葉を受けてT1がEに「Dのアイデアになったら嬉しい」と聞くと、うなずく ㊷T1に多数決の結果選ばれなかった人に対してどのような声をかけるか問われ、D「ドンマイ」G「あら、いやだ」と提案する ㊸T1がFにどうしてAの宣伝した歌に投票したかを尋ねると、「楽しそうだったから」と答える ㊹授業後、GとIがIの宣伝した歌を聴こうとする ㊺授業後、Aが宣伝した歌を口ずさむFにAが近づいて「ポケモン」と聞く									

①Dは、書くことを教師と確認すると、自発的に文章や絵を記入していった。ことばで教師とやりとりができるため、教師は、時々助言した。Dは、他児童に効果的に宣伝するためのポイントを教師に確認していた。②Bは、絵を書くことで、気持ちを伝えようとした。そして、雑誌の一部を切り取って貼り付けた。③Cは、曲の説明を書く際、教師に書く内容の助言をもらっていた。Cの理解力では、他児童に曲のよい部分を書いて説明するのは難しかった。そこで、自分がいつ曲を聴いているかを記述した。

以上のように、宣伝の準備の時間を設けたため、個々の状況に合わせた準備を行うことができ、ほとんどの児童が、能動的に参加するようになった。

3) 授業③

授業③の児童の様子をTable 9に示す。

授業③では、他者の気持ちを受け容れることが難しかった児童が、他者が喜ぶという理由を宣伝に添えたり(⑤)(⑥)、自分の好きな歌にこだわっていた児童が、(⑩)のように友達の好きな歌に興味を持ったりしていた。

また、歌を一つに決めるときに、従来の授業では対話

に参加できなかった児童も、じゃんけんする児童を注視するなどして参加することができた。

4) 授業実践のまとめ

授業実践の結果を、①自分の気持ちに気づく、②自分の気持ちを表出する、③他者の気持ちを意識する、④目的をもって参加する、⑤興味の幅を広げるといふ5つの観点でまとめる。

① 自分の気持ちに気づく

授業①(Table 7)では、活動場面4で、自分の歌いたい歌に投票せず、別の歌に投票したり(⑩)、歌いたい理由を教師に聞かれ、戸惑ったりする児童がいた(②・②)。しかし、宣伝を通して、授業②や授業③では、各児童が自分の好きな歌について理由を加えて発表資料を作り、宣伝できるようになった。

② 自分の気持ちを表出する

学級には、自分の気持ちを積極的に表出する児童がいる一方で、ほとんど表出をしない児童もいる。「歌決め」の事前観察(Table 4)においても、EやG、Iなどは自分の歌いたい歌を積極的に示していた一方で、Hの歌いたい歌は教師が普段の様子より提示し、選択するという

形をとった。授業改善の結果、授業③ (Table 9) では、児童一人ひとりが自分の歌いたい歌をそれぞれの方法で宣伝した。自ら気持ちを表出することが少なかったHも、⑩のように、自分の順番が回ってくると自発的に立ち上がり、教室の前方に移動した。

自分の気持ちを表出する児童は、自分が宣伝する歌を好きな理由を聞かれると、Table 7-⑫のように戸惑っていた。しかし、授業② (Table 8) では、教師と話し合いながら理由を考え、授業③ (Table 9) では、理由を交えて宣伝をすることができた。また、Table 9-⑬のように、新しく気に入った歌について、その理由を自分で述べることができた。

③ 他者の気持ちを意識する

授業が進むにつれ、多くの児童が他の児童により興味を持ち、他者の気持ちを意識するようになった。具体的には、相手の意見を聞いて受け入れられるようになってほしいという教師の願いがあったDが、Table 7-⑬やTable 9-⑭のような、他者の気持ちを考えたり相手の意見を受け入れたりすることができるようになった。また、自分の気持ちを譲ることが難しかったIが、授業③では、友だちの宣伝をしっかり聞くことができるようになった。また、授業③では、全体を通して、「いいね。」というような相手の宣伝に対するつぶやきが多かった。

今まで教師に促されて友だちの気持ちを想像していた児童が、Table 9-⑮のように自発的に想像するようになった。ほかにも、友だちの反応を受けてうれしそうにしたり (Table 9-⑯)、自分の宣伝に興味を持った児童に自分から関わりに行ったりする児童 (Table 9-⑰) もいた。

④ 目的をもって参加する

活動を通じて、多くの児童が授業の目的を理解し、参加するようになった。

事前 (Table 4) と授業③ (Table 9) の両方で、多数決の結果、歌が一つに決まらず、話し合いやじゃんけんで決めるという場面があった。事前の際は、最終投票に関係していない児童が、⑱のように机に突っ伏す姿や、⑲のように別のものを使って遊ぶ姿がみられ、活動に参加することができていなかった。しかし、授業③の際には、じゃんけんをしない児童の多くがじゃんけんをする児童に注目し、活動に参加することができた。

⑤ 興味の幅を広げる

児童の中には、今まであまり聴かなかった歌に興味を持った児童もいた。

例えば、授業③では、事前の際には、自分の歌いたい歌を主張するだけであったBが、他の児童が宣伝した歌を口ずさんだり (Table 9-⑲)、自分が普段聴いていない歌を友だちが挙げた時に「嫌だ。」と拒否していた (Table 4-⑲) Gが、今まで聞いていなかったIの宣伝した歌と一緒に聞こうとしたりする (Table 9-⑳) などの変化が生じた。

以上の5つの観点で見ると、新しい授業は従来の授業と比較して、児童同士が対話し、学級全体が対話に参加

する授業になっていたといえる。

3. 考察

結果で述べた変容について、(1)自分の気持ちに気づく、(2)自分の気持ちを表出する、(3)他者の気持ちに気づく、(4)目的をもって参加する、(5)興味の幅を広げるという5つの視点から考察する。

(1) 自分の気持ちに気づく

多くの児童が、自分の気持ちに気づくことができるようになった。宣伝の準備において、教師が児童の感じている気持ちを言葉で確認する時間を設けたことで、児童が自分の気持ちに気づくことができるようになったのではないかと考えられる。また、元々自分の好きな歌がわかっていた児童は、理由などのさらに深い気持ちに目を向けられるようになった。

(2) 自分の気持ちを表出する

学級には、自分の気持ちを積極的に表出する児童とそうでない児童がいた。宣伝活動において、話す側と聴く側に分かれたことで、表出しやすい環境が作られたのではないかと考える。

また、教師とのやり取りを行ったことで、児童が自分の気持ちを整理し、表出しやすくなったとも考えられる。

このように、普段気持ちを表出しない子も表出できる場を設定したり、児童に応じた表出方法を用いたりすることで、学級のすべての児童が参加する「対話的な学び」を生みやすくなるのではないだろうか。

(3) 他者の気持ちを意識する

対話のためには他者の気持ちを意識することが大切であると考え、宣伝という他者の気持ちを聞く機会を設けることとした。その結果、他者の気持ちを受け入れたり、自分の気持ちを譲ったりするのが難しい子がいたが、友達を意識した言動が多くみられるようになった。

宣伝を聴くことで、友達の気持ちや自分の働きかけが受け取り手にどう伝わるかを知ることができ、他者に共感しやすくなったり、他者と関わる動機付けになったのではないかと考えられる。

また、宣伝を経て皆で歌う歌を決定するという流れにしたことで、自分の歌に投票してもらうという目的のために友達の気持ちを想像するようになったのではないだろうか。しかし、この段階では、明確な目的のないときに児童が他者の気持ちを想像することは難しいと考える。そこで、児童が友達の気持ちを考えた発言をした際に、教師は積極的にその児童を褒めるなどの動機付けをおこなうことで、様々な状況で他者の気持ちを意識するようになると思う。

(4) 目的をもって参加する

学級では、場面によって、一部の児童しか授業に参加していないことがあった。この場面では、一部の児童は目的を持つことができず、参加しづらかったのではないかと考えた。しかし、みんなで歌う歌を決めるという明確な目的を設定したことで、それぞれの児童が「自分の好きな歌を歌いたい」という意義をもって参加するよう

になった。そのうえで宣伝活動を行うことで、多くの児童が授業に参加できたのではないかと考えられる。

(5) 興味の幅を広げる

自分の好きな歌にこだわっていた児童が、友達の宣伝した歌を口ずさんだり、友達と一緒に歌を聴こうとしたりする姿が見られるようになった。

このことから、対話を通して児童の興味関心が広がったのではないかと考える。友達の好きな歌について知ること、今まであまり知らなかった歌の魅力を知り、興味を持った可能性があると考えられる。また、それによって児童同士が歌という媒介を通じた新たなコミュニケーションが生まれたのではないだろうか。

V. 総合考察

本研究では、事前観察をもとに対象学級に在籍する児童の対話の課題を挙げた。

そして、従来の授業に加えて宣伝のための話し合い活動と宣伝という二つの活動内容を行った。

児童は自分の気持ちを教師と確認しながら活動し、自分の気持ちに気づき、表出するための準備を行った。発表のための資料は、教師の支援の基、自分に合った表出の方法を選択し、個々の表出の状況に合わせた準備を行うことができた。

宣伝では、全ての児童に時間を均等に確保し、宣伝を聞く児童は、自分の発言を抑えて、傾聴するようにした。そのため、各児童は、落ち着いて自分の気持ちを他者に伝えることができた。それまで、表出が難しく、他児童に自分の考えを示したり伝えたりする機会がなかった児童も、自分の方法で表出していた。宣伝を聞くという点からも、ほとんどの児童が、他児童の宣伝を傾聴していたため、他者の気持ちを理解し、耳を傾ける態度が育った。

以上の活動の中で、児童同士がお互いに気持ちを伝え合う対話が生まれたり、自分の気持ちや考えをさらに深めていこうとする姿勢が見られたりした。

また、友達の好きなものを知ることによって、授業以外の時間にも、それまで対話が少なかった児童間で、新たなコミュニケーションが生まれた。

謝 辞

本論文を執筆するにあたり、研究にご協力いただいた学級の児童の皆様、保護者様、並びに学級の先生方のご協力に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

中央教育審議会（2016）幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）。

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiedfile/2017/01/10/1380902_0.pdf

（1月20日最終確認）

文部科学省（2017）新しい学習指導要領の考え方—中央審議会における議論から改訂そして実施へ—。

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afiedfile/2017/09/28/1396716_1.pdf

（12月26日最終確認）